

| | |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 植村正久における「志」再考 |
| Author(s) | 松本, 周 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-2 : 5-6 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2308 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

植村正久における「志」再考

松本 周

本年は「プロテスタント日本伝道 150 年」¹⁾である。この記念すべき時に、日本初代のプロテスタント教会指導者、植村正久の信仰と思想に改めて学び直したいと願っている。

植村「志」への注目

植村の信仰思想を理解するにあたって、最初に「志」に注目したのは石原謙であり、「志の宗教」²⁾と植村を評している。そして植村が信仰を志と換言した点に、日本人初代キリスト者としての日本伝統に対する態度を見、石原は次の2点を挙げる。第1に「我々に附与された志、日本の精神、それが基督教により拒まれずに、却て、その中に信仰が伸び育つところの地盤を見出す」さらには「我々が基督を知る以前に、既に神は日本人を顧みて其の心に「志」の力を与へられた」³⁾と論じる。明らかにそこでは、非キリスト教的日本精神文化伝統が、キリスト教信仰との関係において否定的ではなく、むしろ肯定的に受容される筋道が考えられている。そして日本諸伝統の中でも、「志」を強調することにおいて、とりわけ武士道が念頭に置かれている。その上で石原は第2点として「先生は基督教を単に日本的なものに局限せられなかった」と指摘し、「不完全な未熟な幼稚な日本人の魂が新しい生命の光によって基督に役立つものとせられる。か様に高められた基督教を先生は好んで、baptis[z]ed Bushido と呼ばれた」⁴⁾との理解を示している。ここで日本の精神とキリスト教との安易な同一視は避けられているものの、日本文化伝統とキリスト教との関係は断絶であるよりは連続性への傾きをもって把握されている。

以上のような石原における、植村「志」理解は、その後の植村研究に強い影響を与えている。例えば武田清子はその植村論においてやはり「志」に注目する。「植村がいう「志」とは……精神的、宗教的なアスピレーションであり、「動の心」であり、日本人の精神に伝統的に育まれてき

たものである。この「志」は我々日本人が先人から受け継いだ精神的宝なのである」⁵⁾として、植村の「志」概念を日本の精神史的伝統に発出するものと位置づけ、それ故に「これは、内村鑑三が『代表的日本人』において、神の選びの業が二千年来、日本文化の中に働いてきたと見、そのようにして用意されたものを、キリスト教を接木する「台木」だとしたこと、あるいは、新渡戸稲造が、彼がとらえた日本思想のエッセンスとしての「武士道」のエートスを日本国民に神が与え給うた「旧約」と見、それを完成するものこそキリスト教だと考えたこと等と共通するものを含んでいるように思える」⁶⁾と捉えている。これらの植村「志」理解ではその日本伝統文化との連続側面が強調されていることを指摘できる。

キリスト教的祈りと「志」

ところで植村自身はしばしば、キリスト教信仰における祈りと関連で「志」について述べる。「キリスト者の祈りにはこの志を立つということが最も重要な点である。讚美、感謝、懺悔、謝罪皆志を興すまでに徹底して至らねば役に立たぬ。要するに肅しみて神の志を観、何事もこれに従わんと欲するが祈りの本旨である」⁷⁾といった表現には、その連関が明瞭に観察される。そこで「志」を日本文化伝統内在的に捉えた場合、植村の「志」における別側面が充分に明らかとならないように思われる。なぜなら植村にとってキリスト教の祈りとは、従前の生活世界とは異次元の体験であり、その意味で日本精神伝統とは断絶された経験であったからである。それが横浜バンドの源流、宣教師ジェームズ・バラの指導による初週祈禱会での出来事であった。「公然祈りをなせしことなく、その間際まではいかなる宗教思想を抱きつつあるやを知らざりし数名の少年が、俄然自ら希望してかかる有様に立ち至りしものなるをもって、その驚愕一方ならず」⁸⁾と当時を述懐した植村にとって、キリスト教の祈りは、日本従来の

精神生活の延長ではなく、幼少時の清正公への祈願からの宗旨替えでもなかった。それは「ペンテコステ」、「リバイバル」の語を用いて述べられているように、「心霊上に関する革命」⁹⁾としての聖霊経験であった¹⁰⁾。

ここにおいて人は、神的恩寵の主導下にて「生まれ更り」「悔改め」を経験する。そのことを植村は「志」の語を用いて、「悔改めは立志発心の意味にて……已往の生活の浅ましく罪悪に満ちたるを思い、ここに意を決して神に行かんとする向上心なり。神の子たるの位置を確かにし、これを実現せんと志す」¹¹⁾と解説する。そしてこの立志が可能とされるのは仲保者キリストの故である。「人間の孝道を、遺憾なく、また弊害に伴われざるよう、実現したのは独り神に対するキリストの態度である。……イエス・キリストがすなわち完全なる宗教で、その絶対権威である。イエス・キリストは完全なる宗教の所有者である。世界はそのもとに往いてこれを学ぶ外、他にその途がないのである。」¹²⁾この植村の発言はプロテスタント的「キリストのみ」に立脚している。したがって「志」もまた、キリストを通しての神からの賜物であり、「わが志すところ神の意志にあらざるを覚らば、惜し気もなく断じてこれを捨つ。……祈りはキリスト者が神によりて志を磨き、その同志となりて、進退するの機関である。」¹³⁾このように植村における「志」は、徹底的に神の意志に根拠づけられ、祈りが神と人の意志を架橋する。以上のように、「志」への注目については先行研究と軌を一にしつつ、その内容を「祈り」との関連から捉え直すことにより、植村の「志」に包含された他側面が見出されてくるのである。

注

1) これは1859年の宣教師来日を起点としているが、英国海軍琉球伝道会により医師バーナード・ジャン・ベッテルハイム（英国国教会）が琉球伝道へ派遣された時点から数え、本年は163年であるとの意見がある。なお、日本聖公

会は「日本聖公会宣教150周年記念 主教会教書」の中で、上述の働きを前史として丁寧に位置づけた上で、「今わたしたちが祝う150年は、日本聖公会の組織的な福音宣教につながるウィリアムズ主教の上陸を起点として」と記している（http://www.nskk.org/province/others/bp_kyosho0905.pdf、2009.6.30最終確認）。

- 2) 石原謙「志の宗教」『石原謙著作集第十巻』岩波書店、1979年、441-449頁。なお、文章末に「文責在記者」とあり、1932年の『植村全集』出版記念会における講演と記されている。
 - 3) 石原、同上書445頁。
 - 4) 石原、同上書446頁。
 - 5) 武田清子『植村正久 その思想史的考察』教文館、2001年、106頁。
 - 6) 武田、同上書107頁。
 - 7) 植村正久「志と信仰」『植村正久著作集1』新教出版社、1966年、194頁。
 - 8) 植村正久「日本帝国最首のプロテスタント教会」『著作集6』74頁。
 - 9) 植村は幕末から明治への時代状況を評して「日本国を改築するの端、ここに開け、一転して国家の組織を改め、再編して廃藩置県ちよう政治上の改革となりたり。時勢は更に方向を転じて、制度の変革、工業上の進歩を見るに至れり。論理上の順序としてこの次に起こるべき革命は、心霊上に関するものにあらざして何ぞや」と述べている（植村、同上書73頁）。
 - 10) 大木英夫「終りは祝福の祈り」『形成』No.458、滝野川教会、2009年3月、3頁参照。
 - 11) 植村正久「求道者の決心を促す」『著作集6』272頁。
 - 12) 植村正久「宗教とキリスト教」『著作集5』139頁。
 - 13) 植村正久「志と信仰」『著作集1』194頁。
- （まつもと・しゅう 聖学院大学総合研究所助教）